



数列の極限 ($\varepsilon - N$ 論法) 四則演算

無限数列 a_1, a_2, \dots を, $\{a_n\}_{n=1}^{\infty}$ や, 単に $\{a_n\}$ と表す. 数列 $\{a_n\}$ の極限值は, 次のように定義されるのであった.

定義. 数列 $\{a_n\}_{n=1}^{\infty}$ において, 任意の正数 ε に対して, ある自然数 N が存在して,

$$n > N \text{ である全ての } n \text{ に対して, } |a_n - \alpha| < \varepsilon \quad (1)$$

が成り立つとき, α を数列 $\{a_n\}$ の極限值といい, $\alpha = \lim_{n \rightarrow \infty} a_n$ と表す. またこのとき, 数列 $\{a_n\}$ は, α に収束するともいう.

この定義により, 次のよく知られた極限の性質が証明できる¹.

数列の極限の性質

ある実数 α, β に対して, $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = \alpha, \lim_{n \rightarrow \infty} b_n = \beta$ が成り立つとする. このとき,

- $\lim_{n \rightarrow \infty} (ka_n + lb_n) = k\alpha + l\beta$ (k, l は定数)
- $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n b_n = \alpha\beta$
- $\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{a_n}{b_n} = \frac{\alpha}{\beta}$ ($\beta \neq 0$)

が成り立つ.

注意. 証明には, (極限の定義を見てもわかるように,) 絶対値 $|\cdot|$ の操作が必須である. そのため, 三角不等式² が頻繁に使われる.

証明. 1つ目の主張を示すには, 次の2つを示せば十分である.

$$(i) \lim_{n \rightarrow \infty} (a_n + b_n) = \alpha + \beta \qquad (ii) \lim_{n \rightarrow \infty} (ka_n) = k\alpha$$

まず, (i) を示す. $c_n = a_n + b_n$ とおき, $\gamma = \alpha + \beta$ とおく. 目標は,

$$\text{任意の } \varepsilon > 0 \text{ に対して, } n > N \implies |c_n - \gamma| < \varepsilon \text{ をみたす } N \text{ の存在}$$

を示すことである. 任意に $\varepsilon > 0$ を固定する. 与えられた2つの仮定は, 定義に従って, 次のように書き換えられる³.

$$\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = \alpha \iff [n > N_1 \implies |a_n - \alpha| < \frac{\varepsilon}{2} \text{ をみたす自然数 } N_1 \text{ が存在する.}]$$

$$\lim_{n \rightarrow \infty} b_n = \beta \iff [n > N_2 \implies |b_n - \beta| < \frac{\varepsilon}{2} \text{ をみたす自然数 } N_2 \text{ が存在する.}]$$

$N = \max\{N_1, N_2\}$ ⁴ とすると, $n > N$ である全ての自然数 n に対して, $n > N_1$ かつ $n > N_2$ が成り立つので, 上の2つの仮定と三角不等式を用いることで,

$$|c_n - \gamma| = |(a_n - \alpha) + (b_n - \beta)| \leq |a_n - \alpha| + |b_n - \beta| < \frac{\varepsilon}{2} + \frac{\varepsilon}{2} = \varepsilon$$

と評価できる. これで主張が示された.

¹高校数学での曖昧な数列の極限の定義では, 厳密に証明することができなかった性質である.

²三角不等式: 任意の実数 x, y に対して, $|x| - |y| \leq |x + y| \leq |x| + |y|$ が成り立つ.

³あとで三角不等式を用いる事を想定して, $\frac{\varepsilon}{2}$ に対して, 定義を適用している.

⁴ N_1 と N_2 の大きい方を N とする.

次に (ii) を示す。目標は、

任意の $\varepsilon > 0$ に対して、 $n > N \implies |ka_n - k\alpha| < \varepsilon$ をみたす N の存在を示すことである。任意に $\varepsilon > 0$ を固定し、 $\varepsilon' = \frac{\varepsilon}{|k|}$ とおく。仮定 $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = \alpha$ から、

$$n > N \implies |a_n - \alpha| < \varepsilon'$$

をみたす自然数 N が存在する⁵。よって、 $n > N$ である全ての自然数 n に対して、

$$|ka_n - k\alpha| = |k| \cdot |a_n - \alpha| < |k| \cdot \varepsilon' = |k| \cdot \frac{\varepsilon}{|k|} = \varepsilon$$

が成り立つ。よって、主張が従う。

次に2つ目（積の極限）の主張を証明する。目標は、

任意の $\varepsilon > 0$ に対して、 $n > N \implies |a_n b_n - \alpha\beta| < \varepsilon$ をみたす N の存在を示すことである。仮定から、任意の ε' に対して、自然数 N_1, N_2 が存在して、

$$n > N_1 \implies |a_n - \alpha| < \varepsilon', \quad n > N_2 \implies |b_n - \beta| < \varepsilon'.$$

が成り立つ。ここで、 $N = \text{Max}\{N_1, N_2\}$ とすると、 $n > N$ である全ての自然数 n に対して、 $n > N_1$ かつ $n > N_2$ が成り立つので、三角不等式を用いることで、

$$|a_n b_n - \alpha\beta| \leq |\beta| |a_n - \alpha| + |\alpha| |b_n - \beta| + |a_n - \alpha| |b_n - \beta| = \varepsilon'(\varepsilon' + |\alpha| + |\beta|) \quad (2)$$

と評価できる⁶。

任意の $\varepsilon > 0$ を固定する。 ε' は任意だったので、 $1 + |\alpha| + |\beta| \leq \varepsilon$ のときは、 $\varepsilon' < 1$ とすれば、評価式 (2) から、

$$|a_n b_n - \alpha\beta| < 1 + |\alpha| + |\beta| \leq \varepsilon$$

が成り立つ。よって、この場合は良い。

$0 < \varepsilon < 1 + |\alpha| + |\beta|$ のときは、 $\varepsilon' = \frac{\varepsilon}{1 + |\alpha| + |\beta|}$ とおくと、 $0 < \varepsilon' < 1$ なので、評価式 (2) から、

$$|a_n b_n - \alpha\beta| < \varepsilon'(1 + |\alpha| + |\beta|) = \frac{\varepsilon}{1 + |\alpha| + |\beta|} (1 + |\alpha| + |\beta|) = \varepsilon$$

であり、この場合も主張が従う。

最後に3つ目（商の極限）の主張を証明する。積の極限公式を証明したので、 $\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{b_n} = \frac{1}{\beta}$ を示せば十分である⁷。目標は、

$$\text{任意の } \varepsilon > 0 \text{ に対して、} n > N \implies \left| \frac{1}{b_n} - \frac{1}{\beta} \right| < \varepsilon \text{ をみたす } N \text{ の存在}$$

を示すことである。任意に $\varepsilon > 0$ をとり、 $\varepsilon' = \frac{|\beta|^2 \varepsilon}{1 + |\beta| \varepsilon} > 0$ とおく。仮定から、 ε' に対して、ある自然数 N が存在して、 $n > N \implies |b_n - \beta| < \varepsilon'$ が成り立つので、これと三角不等式から、

$$\varepsilon' > |b_n - \beta| \geq |\beta| - |b_n| \iff |b_n| \geq |\beta| - \varepsilon' = \frac{|\beta|}{1 + |\beta| \varepsilon}$$

と評価できることに注意すると、 $n > N$ である全ての自然数に対して、

$$\left| \frac{1}{b_n} - \frac{1}{\beta} \right| = \frac{|\beta - b_n|}{|b_n| |\beta|} < \frac{\varepsilon'}{\frac{|\beta|}{1 + |\beta| \varepsilon} |\beta|} = \frac{\varepsilon'}{\varepsilon} = \varepsilon.$$

が成り立つ。よって主張が従う。 □

⁵ $\varepsilon' = \frac{\varepsilon}{|k|}$ に対して、定義を適用している

⁶ $a_n b_n - \alpha\beta = \beta(a_n - \alpha) + \alpha(b_n - \beta) + (a_n - \alpha)(b_n - \beta)$ である。

⁷ $\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{a_n}{b_n} = \lim_{n \rightarrow \infty} a_n \cdot \frac{1}{b_n}$ に積の極限公式を適用すれば良い。